

<p>第2回全体会出された意見・提案</p>	<p>第2回全体会における回答内容</p> <p style="text-align: center;"><b>対 応 案</b></p> <p style="text-align: center;">(※事務局として考えられる回答や「具体的方策のイメージ」を記述する。中間まとめの「具体的方策のイメージ」の修正・削除・追記含む。)</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>郷土・地域とは、身近な地域をさすのか、三重県全体のことか判然とせず、三重県全体でとらえた場合、地域格差による学校間格差が出るのが気になり(キャリア教育と同様)、公平な機会確保のため、条件不利地域への手当を行うべきである。たとえば、県立博物館のある津地域と遠隔地域とでは当然差はある。</li> <li>施設等への交通手段の確保が課題としてあるが、それに対する具体策が出ていない。</li> </ul>	<p>たとえば、現在休館中の県立博物館については、移動博物館として、県内各地域で所蔵資料の展示を行っており、市町や地域のまちかど博物館等の施設との連携など、さらなる展示資料の掘り起こし等も含めて方策を検討したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教材「三重の文化」は、自分の住む市町の自然や歴史、文化等から学習を始められるよう、県内全29市町の素材が掲載されており、問い合わせ先一覧や、関連施設の掲載なども含む構成となっている。そのことを生かして、子どもたちが、自らの関心によって、見て、聞いて、調べ学習を行えるような活用の仕方について、市町と連携しながら、中学校における実践研究に努め、その成果の普及啓発を進める。</li> <li>平成26年に開館予定の新県立博物館と連携して、三重の自然や歴史・文化に関する地域資源を活用した学習機会の提供や移動展示の取組等による体験教育を推進する。</li> <li>市町・地域の関連施設の積極的な活用の促進、事業者等所有のバス等交通手段の活用など、様々な主体による取組を組み合わせることにより、子どもたちの郷土教育の機会の確保に取り組む。</li> <li>県をはじめ、NPO等の団体など、県内各地域の様々な主体が提供する、多様な体験プログラムの情報が集約された「本物文化体験ホームページ」の市町や学校における積極的な活用を促進しつつ、内容の充実や新規開拓に努める。</li> <li>学校において、子どもたちが郷土の文化財を見て、触れて、学べる機会となるよう、市町とも情報連携しながら、県埋蔵文化財センター等の専門職員が、県内で発掘された埋蔵文化財や地域の文化財を活用して、出前講座を実施する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>地域にある色々な産業への理解を深める具体策がない。</li> <li>キャリア教育とリンクする部分もあるが、地域に根付く地場産業は、地域の文化でもあり、その視点での取組を進めるべきである。</li> </ul>	<p style="text-align: center;">—</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教材「三重の文化」について、特に「産業」「伝統工芸」「特産物」の項目における、地域産業に関連する掲載内容の学習を通じて、地域に根付く産業への子どもたちの理解や関心を高める。</li> <li>職場体験やインターンシップの受入先として、地元の伝統産業、地場産業、観光協会、郷土資料館等の関連事業所の開拓を進め、郷土のよさを学習しながら働く喜びを得る機会を拡大する。</li> <li>地域の食材や伝統料理についての調べ学習や、地場産物の給食献立への取り入れによって、子どもたちの、地域の自然・産業・文化等への理解や愛着を育む。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>たとえば、「三重の文化」について、中学校でどのように活用していくのか、県として具体的にどうしていくのかが見えにくい。</li> <li>地域の歴史・文化・産業等も含め、子どもたちに対して早い段階から郷土教育に取り組むべきであるが、県として、市町に対して、連携や協力も含めて、どう支援し、何をしてくれるのかが重要である。</li> </ul>	<p style="text-align: center;">—</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>市町と連携して「三重の文化」のテーマを取り入れたカリキュラムに基づく実践研究を行うモデル事業を実施し、報告会の開催や実践事例集の活用によって成果の普及を進め、県内全体への「三重の文化」を通じた郷土教育の展開を図る。</li> <li>小学校段階から、三重県の自然や歴史・文化への興味・関心を高め、中学校での郷土教育との相乗効果を図るため、「美し国かるた(仮称)」を制作し、各学校での活用を図るとともに、例えば大会の開催なども含め、市町とも連携しながら、活用や普及の手法について幅広く検討、実践する。</li> <li>学校において、子どもたちが郷土の文化財を見て、触れて、学べる機会となるよう、市町とも情報連携しながら、県埋蔵文化財センター等の専門職員が、県内で発掘された埋蔵文化財や地域の文化財を活用して、出前講座を実施する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>外国人から求められても国歌「君が代」を唱えない子どもが多い理由は、自らのアイデンティティの欠如にあり、自らの地域・郷土に誇りを持って第三者に語れるための、アイデンティティを持てることが重要である。</li> <li>地域のさまざまな人材との交流を通じて、机上の勉強だけは得られないリアリティが子どもたちの中に生まれ、その子の土台になる。</li> </ul>	<p style="text-align: center;">—</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教材「三重の文化」の活用方法として示している、「気づく・見つける」「深める・広げる」「伝える」の3つの子どもたちの活動を踏まえ、子どもたちが実物を観察したり、地域の専門家等に話を聞いたりして、自らの気づきや発見を一層確かなものとし理解を深めていくことのできるような取組を、市町と連携しながら進めていく。</li> <li>文化財所有者等が子どもたちに地域の文化財に触れる機会を提供したり、県埋蔵文化財センターが実施する郷土の文化財出前講座や展示・講座において、本物の文化財にふれる体験を通じて、郷土への愛着と誇りを醸成する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>留学の最大の収穫は、外国へ行って日本の良さ、自らの郷土・地域の良さを見直せることであり、たとえば、ALTの先生などが、子どもたちに対して、もっと目覚めさせてくれることができれば、自らの郷土への自覚を持たせ、調べ学習等への意欲を湧き立てられるのではないか。</li> <li>たとえば、地元のお土産や食材などでも、小さなことが、自分の郷土への目覚めにつながる。</li> </ul>	<p style="text-align: center;">—</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ALTや留学生等との間で、お互いに自らと異なる言語や文化について説明したり、学び合える活動に取り組むことで、子どもたちの異文化を尊重する心・態度や、自らの郷土への愛着や誇りを育む。</li> </ul>